翻訳　ゲーテの劇『わたしたちがもたらすもの』

Eine Übersetzung von Goethes Vorspiel: „Was wir bringen“

栗花落（つゆ）　和　彦

『わたしたちがもたらすもの』
ラォホシュテット新劇場柿落（こけら）としに際しての序幕劇

登場人物

メルテンおとう
マルテおかあ
ニュンフェ
フォーネ
パートス
旅人
少年ふたり

農家の居間

（右手に低い竈（かまど）があり，鍋がいくつか，とろ火に掛かっている。左手に木製の食卓と椅子。天井のすぐ下の高いところには，絨毯（じゅうたん）が一枚掛けられている）

第一場

メルテンおとう，マルテおかあ（ふたりとも，きちんとした農民服に身を包んでいる）

おとう　（もの思いに沈み，少しばかり動揺を見せながら行きつ戻りつしてい

る）

おかあ　（家事好きのおかあらしくかいがいしく歩き回っている。ナプキンを一枚食卓に広げ，竈から平鍋をひとつ手に取って，食卓に出す。平鍋用にスプーンを一本置きながら話す）お座りよ，爺さま。落ち着いてそこに座って。じたばたせんと朝食をお楽しみよ！　さあさあ！　こりゃ一体またまたどういうことなんだい。ねえ，あんたはどうしたっていうの。ここんとこずっともの思いに沈んで，行ったり来たりしてるし，ほとんどものは言わんし，心ここにあらずだよ。何か心に懸かってるのかい。そいつを言っておしまいよ！　どうしてあたしに黙っておけるもんかね。

おとう　この世にはこの通り心に懸かることが色々とあるんじゃよ。

おかあ　もちろんだともさ，心に懸かることや気を遣うことがね。今は落ち着いて朝食だよ！　そのあと外に，野良に出て，実りがどんな風に持ち直したか，様子を眺めて，色よい知らせを聞かせておくれ。あたしゃうちで片づけなきゃならんことがたっぷりあってさ，家畜小屋やら納屋やら屋根裏部屋，地下室やら台所やらでね。それに下男下女ってのは好きなだけおってかまわんけど，何から何まで女房ってのがおらんと，やっぱり何も捗らんしね。スープを堪能してさ，お座りよ！（無理やりおとうを座らせる）スープが冷めんようにね！　ここにスプーンがあるよ！　ここだってば！（無理やりおとうに食事をさせる）

おとう　まあまあ，急（せ）かせすぎるんはよしとくれ。大丈夫，お口がどこにあるかってくらいは分かろうってもんじゃ。

おかあ　（部屋を出ながら，傍白）爺さまが何を心に懸けてるのか，あたしには分からん。爺さまはもう何日か前からすっかり人が変わった風に見えるよ。いつも燻（くゆ）らせてるパイプはもう爺さまの舌に合わんし，もうあたしの言いなりになって暮らしてるわけでもないし。こりゃ一体どういうことなんだろ。こいつははっきりさせんとね，しかも早けりゃ早いほどいいんだよ。

第二場

メルテンおとう　（独りきりで。立ち上がって，女房がいないかどうか，用心深く辺りを見回す）女房がおらんから，しばらくの間は安心じゃな。早う仕

事にかからんと！　わしらが以前計った通り，何もかも現場に合っとるにしても，もう一遍全部計ってみることじゃ。（おおよそ六尺の物差しを一本取ってきて，手始めに舞台奥から手前に計測する）六，そのあとまた四，次いで八，また六じゃ！　実に正確じゃな。（そうこうするうちに舞台前部にやって来る）わしがこの古びた家を取り壊し，新しいのを建てて，何もかも既に準備万端整っとるのを知らされたら，女房め，どんなに驚くことじゃろうて。

第三場

メルテンおとう，マルテおかあ

おかあ　（何か落としものか忘れものをした者みたいに，忙しげに入ってくる。亭主の振る舞いに気づいて面食らい，ゆっくりと姿を見せる）

おとう　（その間，舞台前部の左手から右手に向かって計測する）四，次いで六，また六じゃ！（物差しを折り畳もうとしているうちに，ちょうどその間に割り込んだ女房に物差しがぶつかりかける）

おかあ　（物差しにぶつかるのをかわして，それを掴みながら）およしよ！　そんなに慌てんと！

おとう　（少しばかり気まずそうに）おやっ，驚いた！　お前もおるとはの。

おかあ　こんなに年を取ってもまだ色々ぶっつけられるなんてね。

おとう　（むっとしながらも，おどけて）計っておるのに，どうしてお前は避けんのじゃ。

おかあ　何を計ってるんだい。

おとう　（気持ちを落ち着かせて）見ておらんのか。ここの床，この部屋，この家じゃ。

おかあ　で，何のためにそんな厄介なことなんか。

おとう　（ひとつ間を置いて）とにかくこれ以上隠しておくわけにもいかんし，お前は聞き耳を立てとったからな。というわけで，ばれてもかまわん。要するにじゃ！　わしは建てるんじゃよ。

おかあ　だけど，さだめし砂の上の楼閣をだろ，もう何度もそうだったみたいにさ。

おとう　いや，いや，本気なんじゃ。今度のわが家はまったく新たに，土台から造り上げる。二，三日も経たんうちに，古びたのを即刻取り壊すんじゃ。

おかあ　そいつは，もう何度もあんたの頭に思い浮かんでは消えてった気まぐれの虫ってもんだよ。

おとう　今度ばっかりはその虫にやってのけてもらうんじゃよ。

おかあ　そんなに耄碌（もうろく）してるってのにかい。

おとう　年を取っておる時こそ，まだ生きる気概があるってとこを見せなきゃならん。覚悟を決めて，片づけとくれ，すっかり片づけてしまうんじゃ！支度をしとくれ。近いうちにお前はあの上の方で柿（こけら）がメリメリ音を立てるのを耳にすることじゃろうて。

おかあ　ああ，神さま！　そいつは何のつもりなんだね。あんたはすっかり人が変わっちまったよ，爺ちゃん。普段なら分別ってものを弁（わきま）えてたじゃないか。今じゃあんたは気のいい女房の頭の上で家を取り壊そうとしてるんだ。

おとう　頭の上じゃなんて，とんでもないこった。お前が外へ出てくれたら，それでいいんじゃからな。

おかあ　あたしのきれいな食器という食器が粉々，でこぼこにされちまうよ。

おとう　そいつなら，お隣りの奥さんとこへ運ぶことじゃな。

おかあ　それにあたしの服も！

おとう　そいつなら，司祭の奥さんに取っといてもらうんじゃな。

おかあ　あたしの食卓，椅子に寝床は。

おとう　そんなのは，何もかも元通りでき上がるまで，納屋へ入れとこう。

おかあ　それに，もう三〇年も煮炊きするのに使ってるあたしの竈は。

おとう　そいつは取り壊されるんじゃ。その代わり，お前にはお手製の台所を造ってやる。お前がまた三〇年煮炊きできるやつをな。

おかあ　そんなもんならこれっぽっちも慣れっこないだろうさ。

おとう　使い勝手のいいもんなら慣れもするんじゃから。けど，古びてぼろぼろになった屋根を浸み通ってくる雪や雨にわしの鼻先で舞い踊らせるなんてことには，慣れるはずもないからな。

おかあ　屋根は修繕しておもらいよ。

おとう　屋根はすっかり取り壊さんとな。なにしろ，あの上の方にはまだ絨毯が掛かっておるからな。先だって雪がわしらの寝床を見舞う羽目になった時に，結わえ上げのうてはならんかったやつじゃよ。

おかあ　そいつは一時(いつとき)のことさね。

おとう　砂ぼこりも，お前が建てたがらん気持ちもな。

おかあ　一体ほんとのとこ，その通りになるっていうのかい。あんたはほんとに全然耳を貸す気はないのかい。

おとう　お前が一遍だけでも耳を貸してくれたら，なんもかも上手(うも)ういくんじゃ。うちの家は街道に面しとるお陰で，あんなに大勢が通りかかって，あんなに多くの連中が立ち寄ってくれる。そいつが今じゃ，旅をしとる連中が家の外を見てからかったり，お客たちが家の中に入って苦情を言ったりする時に感じる恥辱を最期まで堪え忍べと，わしは言われとるような有り様じゃからの。

おかあ　だって，食事のことはほめてくれたじゃないかい。

おとう　けど，泊まるとこは悪し様に言われたぞ。

おかあ　珈琲のことはほめてくれたよ。

おとう　それに，戸口が低いって悪態をつかれたぞ。

おかあ　寝床はいいって思ってもらえたよ。

おとう　それに，居心地のいい席がのうて困った，だと。さあ辛抱しとくれ！　うちにあるいいとこは残しておくつもりなんじゃし，うちに足りんものは見つけなくちゃならん。だからお前にこれだけは白状するんじゃが，名づけ親になってくれた左官屋や従弟の大工とはもう取り決めをしてあるんじゃよ。

おかあ　男同士で結託するなんてさ！　あんたらはご清潔な連中だね！

おとう　家の外に運び込まれておって切り揃えてる最中の石のことなんじゃが——

おかあ　願いたくもないことだね！

おとう　ちょうど今取りかかっとる足場のことなんじゃがの——

おかあ　よくもできるもんだね！　なんて不実なまねを！

おとう　うちの家に必要なもんじゃし，近いうちに建つことになるうちの家なんじゃよ。

おかあ　で，新しい納屋みたいなもんを建てる許可をお役所がくれると，あんたらはあたしに信じ込ませるってわけだ。

おとう　そいつをお前が許してくれんとな。

おかあ　で，あんたらはあたしをからかってるんだ！

おとう　むろん，お前のためにやっとることなんじゃよ。

おかあ　いや，そいつはあんまりってもんだよ！　あたしに隠れてさ！　あた

しの知らんうちになんてね！

おとう　落ち着いとくれ！

おかあ　この昔ながらのきれいな古びた木組みは，まだあたしの曾祖父（ひいじい）さまの代からのものなんだよ。

おとう　曾祖父さまの代にはきれいじゃったけど，今じゃ至るとこ虫食いだらけじゃの。

おかあ　この何もかもがあたしの目の前で取り壊されるのを見せられるんだ。

おとう　取り壊されるまで，目を瞑っておるんじゃ。新しいのがあの上に建つまで，目を向けんことじゃ！　そん時が来たらきっとお前を喜ばせてやる。ひどい住まいにおると，実直なもんでも物笑いの種になるんじゃから。居心地のいい席に座ったら，半ば食い終わったも同然じゃ。それにお前が将来お客たちにもっと立派な部屋で，もっと居心地のいい席で旨い料理を振る舞もうたら，これまで以上にきっと旨いもんになろうて。

おかあ　そんなこと，ほとんど信じないね！　家がもっとよくなりゃ，お客はもっと美味しいご馳走も期待なさるだろうさ。

おとう　まあな，そいつも不運ってわけじゃないぞ。そうなりゃ，ひと皮むけて，いっぱしのことを習うて，時代とともに歩むってわけじゃ。

おかあ　時代ってのは，あたしの老いぼれた脚にはまったく速すぎるよ。

おとう　わしらは他のもんに引っ張ってもらうんじゃよ。

おかあ　いや，あたしゃあんたって人がまったくもって分からんよ。悪い霊が取り憑いて，目が眩（くら）んでしまったんだ。ただごとじゃないよ。（座りながら）そのせいで，体中がおかしくなってしまったね。あたしゃこの場から動けないんだよ。

おとう　（その間に窓越しに外を見て）ほら見てご覧，重い荷を積んだ馬車じゃ，六頭立てになっておるぞ！　おそらくは身分の高い方々じゃな。立ち寄って下さると，わしは恥ずかしゅうて死んでしまいたいくらいじゃ。

おかあ　（喜びに躍り上がって）さあ，お越しいただくんだよ。家はひどくとも，こざっぱりとしてるし，おもてなしに文句は言わせんよ。ありとあらゆるものをまだ蓄えてるんだし！　早く，急いで食事の支度をせんとね。

おとう　見てご覧！　行儀のええ幼い坊やがひと組，馭者席に座っとる。そのひとりが跳び降りてくる。馬車がゆっくりと進んで，坊やがうちに近づいてくるぞ。あれは元気のええ子じゃ！　ほれ，もうやって来たぞ。

第四場

前場の人々，第一の少年

第一の少年　こちらに泊まることはできるのかい。
おかあ　ええ，もちろんですとも，お坊ちゃん。
第一の少年　ご主人方がこちらに小一時間ご逗留なさりたがっているんだけど。
おかあ　どうぞ，中へお入り下さるご栄誉をお示しいただきとう存じます。おもてなしに相応しいものがきっと見つかることでございましょう。
第一の少年　ああ！　そんなことはご心配に及びませんよ。ご主人方は，必要とされるものはみんな持参なさいますから。（退場）
おとう　宿屋の亭主には極上の知らせってわけじゃないぞ。
おかあ　すぐに何もかも整えるから。（部屋を片づける）その間にお客さま方をお出迎えしとくれ。
おとう　そら，早くもおなごの方がおひとりお越しじゃ。

第五場

前場の人々，ニュンフェ，次いで**第二の少年**（ニュンフェのあとを追って貴重品入れを運ぶ）

ニュンフェ　ごきげんよう，気のいい方々！
おかあ　ようこそ，お美しいお嬢さま！
おとう　心より歓迎申し上げますぞ！
ニュンフェ　（辺りを隈なく見回す）
おとう　（小声でおかあに向かって）気をつけるんじゃぞ！　このお方もお口を開かれると，またぞろこのお粗末な家の悪口をさんざん吹聴なさるじゃろうて。さだめし，泊まるとこを探すよう命じられておる女官じゃな。
おかあ　いいかげんにしときよ。今日に始まったことじゃないんだから。

おとう　（誰にともなく）けど，きっと最後になるぞ。明日には屋根を取り壊してもらうんじゃからな。

ニュンフェ　（元気よくふたりの間に割り込む）まあ！　ご親切で気のいい方々，あなた方の元にいると，なんて気分がよくなるのかしら！　このつましく見える小屋があたしには天国になるの。

おかあ　聞こえたかい，爺さま。

おとう　（誰にともなく）はてさて，こいつは奇妙じゃの。こんなお世辞を耳にするとは，初めてのこった！

ニュンフェ　ここにいるとまったく自然の間近にいる気がするの。こちらにいるとあたしの目はまがいものの輝きなどに眩惑されないわ。こちらにいるとあたしの心は単純素朴な幸福感に身を委ねる完全な自由を味わうの。ああ，妹たちや友人たちがあたしみたいに肌身で感じられるのなら，あたしたちは一緒にこれからの日々をあなた方の元で過ごしたいところだわ。

おかあ　聞いたかい，爺さま。

おとう　（誰にともなく）わしにはそいつがひと言も分からん。このお方が口にされてるのは妹ごやご友人の方々のことじゃ。してみると，ご主人さまのことじゃないぞ。このおなごの方はどなたなんじゃろか。こんな呪わしい鳥の巣みたいなとこで一生を過ごしたいなどと願っておられるこの美しい娘ごは。

ニュンフェ　（その間に竈の奥へ足を踏み入れる）この竈の傍（そば）に立っていたいものね。ここに立って罪もないお料理をこしらえては，心からの愛を込めてあなた方をおもてなしして，おふたりの老後の重荷を軽くして差しあげ，この通り幸福を感じていたいものだわ！（貴重品入れから容器をいくつか取り出して，朝食の支度に取りかかる）

第六場

前場の人々，第一の少年

第一の少年　ここは一体どうお思いです。我慢できますか。

ニュンフェ　この通り美しく，世にも好ましくて，他のどこにもないところだ

わ！　中に，早く中にお入りなさいな！

（第一の少年とおとう，退場）

ニュンフェ　この神々しい屋根の下，この低い竈の傍で，あたし自身の様々な感情とすっかり相和(あい)して楽しい日々を過ごすほど，素晴らしいことはまったく思いつかないわ。

おかあ　ああ，飛び抜けて愛らしい娘さん，もう少しだけ早くお越し下すっておればねえ。うちの亭主がこの家を取り壊したがってるんだよ。もしかしてあなたさまならこの家をまだお救い下すったかも。

ニュンフェ　取り壊す，ですって。古(いにし)えの黄金時代のこの記念碑を！　平安のこのお住まいを！　ああ，残酷なお方だわ！（自分の仕事を続ける）

第七場

前場の人々，メルテンおとう，フォーネ，第一の少年

おとう　どうぞ中にお入りなさって，手前どものところはまだどうにか我慢できるってことをご自分でご納得下さいまし。むろん，少し時を置いてまたお越しになりゃあ，今よりもきっと居心地がいいものと思っていただけましょうて。

フォーネ　これでよしとしましょうよ，ご亭主殿。多少ことなら問題じゃありません。あたしたちはこの通り上機嫌ですもの，どんな厄介ごとでも我慢できる術を，いえ楽しむ術を心得ておりますわ。

おとう　とすると，あなたさまとあちらのお嬢さまはおおかた双子の姉妹でおられるんじゃな。光栄なことに，あのお方もこの安宿が世にも好ましく思えるっておっしゃって下すったんじゃ。

フォーネ　そうとばかり今申し上げるわけにも参りませんわ。あたしには場所などまったくどうでもよくってよ。我慢ならないのは，ただだひとつ，退屈ってものなの。

おとう　そいつならむろん，時にはこのうちに巣食っておることも。

フォーネ　でもそんな心配は全然しておりませんわ。なにしろあたしは自分や他の人たちから退屈を追い払う術(すべ)を心得ていますもの。

おとう　あなたさまがそいつをここでどんな風に取りかかろうとなさるんか，今やっぱり見てみたいもんじゃな。

フォーネ　そんなことならすぐに味わわせてあげましょう。（一番お気に入りの歌を一曲歌う）

おとう　（今の今まで不審の念を抱きながら耳を傾けていたが）美しいお声じゃ，世にも愛らしいお声じゃ！　そう，この通り願ってもないもんじゃな。

おかあ　（同じく時折り歌に注意を払って）どう思うね，爺さま！　聴かせるもんだって，あたしゃ思うがね。

ニュンフェ　妹よ，愛らしい歌をありがとう。あなたが歌ってくれて，ちょっとしたお台所仕事が楽しくなったわ。（その間にニュンフェとおかあ，朝食の支度をして，小さなスープ鉢の一種と銀の杯を食卓に乗せる）今度はでも素朴なお料理も味わってみて。田舎びた竈に掛けてこしらえたものなのよ。（少年に向かって）外に行って，野の花を何本か持ってきておくれ。この食卓を飾るんだから。

フォーネ　こういうことならとても見事にやってのけるわね，お姉さまは。

ニュンフェ　でもうちの三人目はどこにいるのかしら。

第一の少年　あのお方はまだ馬車の中に座っておいでです。中に入ろうとなさらないので，心よりお頼みしたのですが。こんな洞穴（ほらあな）には足も踏み入れたくない，と誓っておっしゃいました。

フォーネ　あたしたちが自ら出向いて，あの子を連れてこなくちゃ。おいで！

第八場

おとうと**おかあ**

おとう　聞いたか。洞穴じゃと！　そんなことは二度と言わせんぞ。明日になりゃ屋根は取り壊さなくちゃならん！　わしは洞穴をきっと風通しのええもんにしてやるんじゃ。

おかあ　そらお聞きよ，礼儀を弁えてるあのお嬢さまが何とおっしゃってるかをね。楽園だわって，あのお方は請け合って下すってる，うちの家がだよ。

おとう　あのお方が楽園をどんな意味に受け取っていなさるんか，誰にも分か

らんぞ！　けど洞穴って言葉で何を言わせたいのかじゃったら，わしにも随分のとこ分かるってもんじゃ。

第九場

前場の人々，パートス，ニュンフェ，フォーネ，少年ふたり（ふたりはほどなく遠ざかっていく）

フォーネ　さあこちらに来て，妹よ。あたしたちがいるところに，あなたもいてかまわないのよ。

ニュンフェ　あなたのためにこしらえたものを召し上がって。そして単純素朴な罪もないこのお宿のことは，恥ずかしがらないで。

パートス　お姉さまのお食事はご免蒙るわ。いただけるものは，いただいてしまったから。お姉さまたちはご自分なりに楽しんでいいの。あたしのことは心配ご無用よ。でも今は何よりもまず，門と扉に鍵を掛けて，あたしたちの集いに押しかける人をこれ以上増やさないことだわ。（おとうは少しの間退場する。フォーネとニュンフェは食卓に座り，そこに出されているスープを銀の杯から啜る）

パートス　あたしが足を踏み入れるところでは，何もかもがすっかり様変わりするの！　あたしの才気が現実を造り変えられるとしたら，この場所は神殿にならなくてはいけないところね。

おかあ　（おとうに向かって）いくらなんでもうちの家の中がそんなにひどく見えるはずはないんだよ！　おひと方は楽園だと思ってられるし，もうおひと方はそれどこか神殿に変えたがっておいでだよ。

おとう　こんな事態が予想できておったら，むろん，建て替え代を切り詰められたんじゃがの。けどどうやら，このお嬢さま方が変えたがっとるのは，ご自分のためだけで，他人さまのためではなさそうじゃの。

パートス　（ふたりの間に割って入って）おふたりはひと組の神々しいお方とお見受けしますわ。

おかあ　あたしらが神々しいのかなんて，分かりゃしませんよ。だけどあたしらが正直者だってことは，誓えますよ。

パートス　おふたりは長くご一緒にお暮らしなの。

おかあ　あたしらが若けえ時からです。

パートス　この倒れかかった家でね。

おとう　まったくその通りで！　わしらがまだかくしゃくとしてた頃にはもう倒れかけだったんじゃ。

パートス　（少しびっくりした面持ちでふたりを見つめながら）まさかあたしが思い違いをしている，とでもおっしゃるの。

おかあ　何をそんな風にあたしらを見つめてらっしゃるんで，お嬢さま。

パートス　おとぎ話のような昔の時代が戻ってくる，とでもおっしゃるの。

おとう　そいつはどういうこってす。

パートス　まさかおふたりの言葉の裏には何か別の隠しごとがある，とでもおっしゃるの。

おかあ　あたしゃあなたさまのおっしゃることが呑み込めんです。あなたさまのお陰であたしゃ気がかりなんですよ。

パートス　フィレーモンとバウキス[①]のことを耳にしたことはないの。

おとう　ひと言もありゃしませんぞ。

おかあ　一体そりゃどなたのことなんで。

パートス　あなた方ご自身のことよ，それとはご存じなくね。あたしの目の前におられるのが，フィレーモンとバウキスなのよ。

おとう　（誰にともなく）いや，そいつはあんまりってもんじゃ！　手始めにこの方々はわしの家を楽園やら，洞穴やら，神殿やらにお変えになる。で今度はそれどこか，わしら自身を話の種になさろうってわけじゃな！　頼むからもうええ加減に元通り厄介払いできたら，いいんじゃがの！

パートス　あたしの目の前におられるこの神々しいご夫婦は，ほんのお若い頃に契り合い，貞節なおつき合いを重ねて人生を過ごされていらっしゃるのです。元気なお子さんたちの合唱隊がご夫婦を取り巻いていますわ！　次第にお子さんたちは離れていきます。娘さんたちにはお嫁入りの支度が整えられ，息子さんたちにはお嫁の心配要らずです。お年を重ねてなお朗らかに働いておられるお陰で，幸せなおふたりなのです。

おとう　今までのとこ，このお方のおっしゃることはほんとじゃ。

おかあ　そいつはぴったし当たってるよ。

パートス　手厚いおもてなしでかいがいしく，おふたりは見知らぬお客をいつ

もおうちにお泊めになった。お住まいが限られていればいるほど，一層盛んにお骨折りが発揮されましたわ。補うべきところは，愛情と心配りで補われたのですね。

おかあ　ちょいと，これはあんたが当て込んでるのとは違ってるみたいだよ。

おとう　こんなおほめの言葉に預かるとは，むろん見込んではおらんかったぞ。

パートス　慎ましさの思いに包まれたおふたりは，ご自分の境遇をつまらぬものとは思っておられず，古びた家は狭すぎるとも，ひどすぎるとも思っておられなかったのです。

おとう　（傍白）今のは当たっておらんぞ。なにしろこの古びた家はもう長いことえらくひどいもんじゃと，わしは思っておったからな。

パートス　そして他でもありません，この慎ましさに妨げられて，神々を歓迎されたことをおふたりは見抜けなかったのですわ。

おとう　（傍白）今度は気味が悪うなってきたの。なにしろこの方々は神々ご自身なんか，それとも頭がおかしいんか，どっちかなんじゃからな。

パートス　（その間に席を立った他のふたりに向かって）ああ，お姉さまたち，この気がよくて神々しい人たちに相応しいのは，新しい家を建てて差しあげること，おふたりを若返らせて差しあげること，心から手厚くおもてなしをする神殿の神官に叙して差しあげることだわ。

フォーネ　あたしはそれで満足だわ，妹よ。あなたは心ある人たちについては多くのことができるわね。でもこの梁（はり）材と石については何ができるというのかしら。

おとう　じゃったらそれについては，ご心配には及びませんぞ。ちょうど今建てかけておるところじゃて。石や木材や必要なもんは何もかも調達済みじゃ。ただ，女房とすっかり折り合いがつくとこまではまだいっとりませんがの。

おかあ　まあまあ！　お嬢さま方は若返りのことまでもおっしゃて下すったんだよ。その通りして下すったらねぇ！　新しい旅籠に，新しい女将（おかみ），新しい亭主だよ！　こいつは聞いていいお話だね。

おとう　ええ加減にせんか！　そいつは上手ういかんかも知れんって，案じられるんじゃ。

パートス　旅籠のことはもうおっしゃらないで。まったく別のお話をしましょう。

①フィレーモンとバウキス：ギリシア神話に登場するひと組の信仰篤い律儀な同い年の老夫婦フィレーモン（Philemon）とバウキス（Baucis）のこと。ふたりはフリュギア（Phrygien）の地で貧窮生活を送っていたにもかかわらず，旅人に変身して宿を探し求めてきた神ゼウス（Zeus）とその息子ヘルメス（Hermes）――ローマ神話では，本作品の十六場以降に登場するメルクーア（Merkur，ローマ名：メルクリウス Mercurius）に相当する――のふたり連れを心より歓待した。ふたりの神は周囲の無情な隣人達の非礼な態度に対する罰として，彼らの家々を沼の氾濫によって押し流す一方，夫婦の住む荒ら屋のみは，その手厚いもてなしの返礼として，屋根を黄金で葺いた大理石の壮麗な「神殿」へと変貌させた。老夫婦は両神の神官，また神殿の宮守として最期まで尽くして同じ時刻にこの世を去りたいとする願いが聞き届けられ，死を迎えた時，寄り添う二本の樹木（樫の樹と菩提樹）に変身した，という。ローマの詩人オヴィディウス（Publius Ovidius Naso: 前43-後17頃）の『変身譚 Metamorphosen』（第八巻　626-724行目）に伝えられるこの神話は，ゲーテの悲劇『ファウスト Faust』（第二部　11043-11383行目）では，悪魔メフィストーフェレス（Mephistopheles）の奸計によって，燃え盛る小屋もろともに老夫婦が焼死を遂げる悲劇的な結末に変奏されている。

第十場

前場の人々，旅人

旅人　（外で）もし！　旅籠屋（はたご）！　旅籠屋さん！　どうして門が閉まっているのです。どうして扉に鍵が掛かっているのです。中に入れて下さい！　中に入らなくては。

パートス　あたしたちの神聖な集いを妨げようとする恥知らずは，どなたかしら。

おとう　（窓に向かって）あれは歩き旅の男じゃな。

フォーネ　（窓に向かって）感じのいい若いお人だわ。

ニュンフェ　（窓に向かって）ああ，どこに行っても快い自然の風景を訪れようと，あの通り苦労している愛すべき人々のおひとりであるのは，確かね。空が急に曇ってきたわ。雷雨になるのかしら。あの素晴らしいお人をこれ以上先に行かせないで，中にお入れして。

パートス　あなた方，あたしを独りっきりにしてくれるお部屋は他にあるかしら。

おとう　ご覧になっておるとこが，まるまる家ってわけです。

パートス　それじゃあのお方は外に留まっておられる他ないわ。あたしは手をお貸しできませんことよ。（窓が開いて，旅人が跳び込んでくる。良家の出らしいドイツ人の歩き旅の衣装を身に纏っている）

旅人　何を目にしていることでしょう。ひと気のない侘びしい部屋に足を踏み入れる思いがしていたのですが，世にも素晴らしいお仲間を見つけたとは。ご挨拶申し上げます，お嬢さま方。これは，これは，ご亭主に女将！　幾多の森を通り抜けては幾多の山を登り切り，幾多の眺めに感心しては幾多の廃墟を這い回り，幾多の水車小屋で寝泊まりしたわたしです。ですが，これほど幸運な冒険の旅に出くわした試しはどこにもありません。

フォーネ　（小声で他の人々に向かって）このお方はまったくあたしの気に入らないってわけじゃないわ。

ニュンフェ　とても興味深いところをお持ちだわ。

パートス　行儀作法をよく弁えておられるところを期待させるわね。

旅人　何から切り出せばよいでしょう。どこで打ち切ればよいのでしょう。生け贄（にえ）を捧げよとおっしゃるのは，才気溢れる優美なお方に対してでしょうか。気高い自然そのままのお方に対してでしょうか。それとも威厳のあるお方や実直なお方，貞淑なお方に対してなのでしょうか。

フォーネ　こちらはどうやら観相家（フユズィオグノミスト）①のご様子ね。振りまいていらっしゃるお世辞なら，あたしたち，喜んで受け入れますことよ。念には念を入れて，あの目新しいやり方であたしの頭に触れてみたい，などとおっしゃりさえしなければね。

おとう　どんなご用なんじゃろか。

おかあ　何をご用命におなりで。

ニュンフェ　もしやあたしどもの朝食をお断りなさるとでも。おもてなしをさせていただけますか。（旅人に杯をひとつ差し出す）

旅人　これほどお美しい両の手から元気の溢れ出る飲み物をいただくとは。これをお断りできる者などおりましょうか！　ですが，わたしに恥をかかせないで下さい！　今度はわたしがお尋ねする番なのです，何を差し上げましょうか，どんなご用ですか，とね。

フォーネ　あたしどもに申し出ていただけるものって，一体何ですの。

旅人　ひけらかすわけじゃありませんが，この上もなく技巧を凝らした趣向なのです。

フォーネ　あたしどもに！　技巧を凝らした趣向を見せて下さるなんて！　お姉さま，このお方がそれをどんな風に切り出されるのか，是非とも拝見してみましょうよ。

ニュンフェ　これであたしの喜びはまるごと消え去ってしまったわ！　このお方を自然が生み出した，繊細な感情を持った優しい息子だと思い，今しもご一緒に山や丘，目に見える眺め，谷や頽(くずお)れたお城について楽しく語り合おうと思っていたのですが，人のいいこのお方は結局のところ，奇術師なのですね！

パートス　たとえそうだとしても，何の問題もないところよ。あたしならこういったものはおそらく一緒に黙って見ていられるわ。こんなものとはこの先何の関わりも持たないように，とおっしゃってさえ下さるならね。

フォーネ　（旅人に向かって）まあ！　してみるとあなたさまはやはり，世間で言う奇術師なのね。

旅人　とんでもありません，お嬢さま方！　ひとつひとつの技，ひとつひとつの手仕事に対して，世間というのは別の名称をつけるものなのです，いえそれどころか，最も気高い最上のものに対してさえ吐き気を催すような名称をね。それでも，自ら名乗りを上げよとおっしゃるのなら，わたしは不可思議なものを取り出してお見せする術(すべ)を心得た博物学者(フューズィクス)なのです。博物学者というのは，最高の真剣さと近しい者であり，その場合は哲学者とお呼びになっても差し支えありません。また最も卑俗な戯れとも近しいのですが，その場合には奇術師と見做(みな)されてもかまいませんよ。

ニュンフェ　およそこんなたわ言などと，まったく関わりを持ちたくありませんわ。

フォーネ　どうして持ってはいけないのかしら。あたしなら，無邪気にからかわれると，いつも楽しくなるわ。

パートス　それじゃやはりこのお方のお好きなようにしていただいて，お戯れを楽しく拝見しましょう。このお方があなたたちの心や趣味を惑わそうとなさるくらいなら，あなたたちの目や五感を瞞して下さるほうが，何と言ってもましだもの。

旅人　お嬢さま方，誠実であれとわたしに求めておられるにしては，わたしがお目にかけなければならないこのちょっとしたお手柄の種も，いささか軽く見すぎておられるご様子ですね。わたしが心に思い描いておりますものは，

なるほど戯れであるかも知れませんが，まったく混じりっ気なしのおふざけというわけでもないのです。と申しますのも例えば，わたし独りが戯れるのではないからです。あなた方がこの戯れに，しかも個性を持ったおひとりおひとりが参加なさるお気持ちがないのであれば，まったく何の成果も挙げられないのです。例えば早速，この話から始めましょう。つまり，ここにおられるとあなた方のご気分が上々ではないってことからね。

ニュンフェ　どうして上々でないといけないのかしら。

フォーネ　とはいえ，気分がそんなにまるっきり悪いとも言えないし。

パートス　あたしたちが率直に認めたいのは，気分がさぞかし今よりよくなるかも知れないってことね。

旅人　この場で何らかの変化が訪れるのを待ち侘びるなんて，あまりに煩わしすぎることでしょう。

おとう　むろんじゃとも！　おまけに，新しいのを建てられる前に，この家から立ち退くことを皆さまにお願いせねばの。

旅人　だからこそ，これが一番確実だと思うのですが。わたしたち自らが場所を変えては！　これには，まったく大した面倒を伴わなせるつもりはございませんから。

フォーネ　ただし，馬車に座って，お天気が悪くてもよくても，たとえ何里先であっても行く気があるとしたら，のお話ね。

ニュンフェ　その通りだわ！　あたし，ここがこの度は気に入っております。他でもないこちらに留まりましょう。

パートス　でも，このお方がおっしゃらなくてはいけないことを，せめてお聞きしましょうよ。この方がお話を持ち出す口振りは，この場合何か特別なことをお考えなのかも知れないってことを期待させるわね。

旅人　確実にして疑う余地もないことなのです，お嬢さま方！　なぜと申しますのに，不可能なことを可能にする不可思議な方法を，わたしがもしも他の奇術（ホークス ポークス）のまじないと同様に難なく意のままにしていないのであれば，およそ正当な権利を持って博物学者の名乗りを上げることなどどうしてできるでしょうか。今から例えば，わたしたちがここにご一緒している通り打ち揃って，場所を変えて空中に昇り，別の場所に，神々しいところに居を構えるという趣向であれば，お気に召されますか。

パートス　そいつは実に心地よいものであって欲しいわね。

フォーネ　あたしもすぐにご一緒しますわ。

ニュンフェ　決心を固めますわ，気は進まないけれど。ここから，無垢の支配するこの領域から身をもぎ離すのは，ただただ断腸の思いですわ。

旅人　さあ，お年を重ねた方々，お体の具合はどうですか。あなた方もお仲間に加わりますか。

おとう　風変わりなお申し出じゃの！　ほとんどその気になっておりまする！　じゃが，それをどうするおつもりなんか，まずはおっしゃって下さるかの。

旅人　で，こちらは，女将は。

おかあ　いやだよ，あたしゃそんなもんに関わりたくもないね。そいつは混じりっ気なしの魔法だよ！　だってあたしゃもう何度も，まめに家事をこなす気のいいおかあってことだけで，まるで龍の悪魔があたしんとこに飛んできては去ってしまうみたいだって，疑われたこともあるんだからね。行って下さいまし，お若いお方，あたしの体に近寄らんで下さいましな！

旅人　どなたも無理にとは申しません。技巧を凝らした乗り物を調達しましたら，大半の方がこの旅に賛同の声を上げて下さるものと思います。ご一緒したいとおっしゃる方は，手をお挙げ下さい。（おかあ以外の全員が手を挙げる）ですが，その前に是非ともご安心もしていただかなければなりません。気球②のことは近頃色々噂に聞かれたことがおありでしょう。紳士淑女の方々が気球に乗って舞い上がったのです。かなりの昔からこちら，ファウストのマント③についての本当のお話は，どなたにも知られております。このふたつの試みを基にして，三つ目をやってみましょう。これなら大成功間違いなしです。こちらの上には絨毯が一枚掛かっているのが見えます。あれはどんな絨毯なのでしょう。

おとう　昔はそいつをえらく大事にしておった。代々受け継いだ古い絨毯なんじゃ。けど今じゃ，そいつをあの上に結わえてしもうたんじゃ。先だっての雪がよりにもよって桁外れにわしらの寝床を見舞おうとしたからの。

旅人　あの絨毯を手早く下へ降ろすことはできないでしょうか。

おとう　手早うというわけにはいかんじゃろ！　わしなら大きなはしごを取ってこんとな。そいつをあの上に結わえつけるのに，二，三時間かかったからの。

旅人　それは大した手間でもないでしょう。お美しい方々，あなた方が力を貸すとおっしゃって下さるなら，わたしは短い間に思い切って絨毯を下に降ろ

します。こちらの紙切れをお取りになって，僅(わず)かな楽譜をご覧の上，お歌い下さい。あなた方はかつて，月を引っ張り降ろす④時に歌われた歌のことをお聞きになったことがおありでしょう。この場合肝心なのは，絨毯一枚のことに過ぎません。ですが，このやり方は，わたしたちが一旦自分の高さに引っ張り降ろして，一層盛んにわたしたちを引き上げてくれるものであれば，どんな高いところにあるものにも当て嵌まるのです。

（女性たちが歌う間に，旅人は遠ざかっていき，着替えに必要な時間を利用する。絨毯がゆっくり降りてきて，床の上に広がる）

でもどうして　歌という歌が
天に向かって鳴り響いているのかしら ――
かまわず　降りてきておくれ
空の高みで
瞬き逍遙する星々よ
優しく抱きしめてくれる月(ルー)の女神(ナ)よ
かまわず　降りてきておくれ
暖かな歓喜の日々を過ごす
至福の神々よ
あたしたちの元に
かまわず　降りてきておくれ！

旅人　（ゆったりとした祭服に身を包んで戻ってくる）見慣れぬ衣装でお目見えしましたこと，お許し下さい！　ですが，不可思議なことは普段のやり方では発揮されないのです。ご覧の通り，絨毯は下に降ろされ，わたしたち皆を乗せて再び舞い上がる支度がまさしくこの通り整っております。軽いものなら軽々と優美に持ち上げてくれますが，たとえ重いものであっても少なくとも高いところへ引きずっていってくれます。絨毯の上に乗る勇気をお持ちの方はどなたでしょう。

パートス　（絨毯に足を踏み入れて）あたしが絨毯を高いところへ持ち上げるのよ，絨毯があたしを持ち上げるのじゃないんだから。

フォーネ　これがどこへ行くのか，もうピンときたわ。お仲間に加わります。（絨毯に足を踏み入れる）

ニュンフェ　少し不安を感じるの。まったく気分がすぐれないわ。でも妹たち，あたしの手をお引きなさい。あとには残らないから。（同じく絨毯に足を踏み入れる）

旅人　さあ，お年を重ねた方々！　本当のところ，お体の具合はどうなのですか。こちらに近寄る勇気もないと。

おとう　かしこまった，と申し上げたいの。いかにも，やらずにはおられんところじゃて。こんなに目新しゅうて風変わりな趣向じゃったら，とっくの昔に試してみたかったの。

おかあ　はてさて，あんたはすっかり頭がどうかしちまったの。どこへ行く気なんだい。ことが上手くいったら，あんたは永久に取り返しがつかんし。失敗すりゃ，少なくとも片脚を挫（くじ）いちまうよ。

おとう　わしにはかまわんでくれ。こんな機会は二度とお目にかかれんし。こちらのお美しいお嬢さま方みたいな勇気がわしにはないとでも言うんかの。

フォーネ　それで結構よ，ご亭主！　いらっしゃいな。目が回ったら，あたしに掴まっていてね。

おとう　うっとりさせるもの言いじゃの！　そいつは二度とおっしゃっていただかんようにしたいもんじゃな。（絨毯に足を踏み入れる）

旅人　（人々を並ばせて点検する）そろそろ結構です！　ですが，まだ釣り合いが取れておりません。と申しますのも，ご覧の通り，わたしが釣り合いの錘（おも）りとして斜交（はすか）いになって真ん中に横たわるつもりでおりますから。女将さんは是非とも今のうちに近寄って下さらないと。たってのお願いです，どうかわたしたちのところへお越し下さい！

おかあ　いやだよ！　滅相もないことだ！　良心を汚したくなんぞないね！　あたしゃここを一歩も動かんし，唆（そそのか）されたくないのも間違いなしだ。あんた，あたしのために忌々しい絨毯から降りとくれ！　心から，心の底から，お願いだよ！

おとう　一旦位置についたんじゃから，こいつはいっぱしの趣向になって欲しいと思っとる。名づけ親の左官屋に言っとくれ，従弟の大工に言っとくれ，何もかも取り決め通りに手配してやって欲しいんじゃってな。わしはその間に乗って行って，神のみ心のままに戻ってくる。生まれ変わった家，生まれ変わった人間ってわけじゃな。わしが思うに，お前も一緒に来てくれたら，何もかも一蓮托生なんじゃが。（絨毯の前面が空中に立ち上がって，その上

に立っている人々を覆い始める）

おかあ　おやまあ！　なんとまあ！　おふざけと思ってたし，できっこないって思ってたよ。今じゃあの魔法使いのお陰で本物だ。絨毯が空中に昇ってく。お客連中が舞い上がって去ってくよ。下手すりゃ，お嬢さま方だってまったくのとこ魔女か，魔法を操る一味かも知れんし。

旅人　（絨毯の背後から出てくる）女将さん，お願いです，ご一緒して下さい。お仲間に加わっても危険などありません。池の水面を滑る小船のように穏やかに進みますから。女将さんは最上のお仲間と連れ立っていくのですよ。

おかあ　いや，いやだね，あたしゃ皆さまと一切関わりたくなんかないよ。お仲間ってのは，藪から棒に，悪魔のとこへ行こうって決め込む結構な手合いかも知れんし。そう，そうなんだ，お客さま！　お目を大きく開けて，しかめっ面をすりゃいい。驚かすなんてのはなしだよ。派手な上っ張りを身に纏ってても，黒い悪魔の正体はあたしには見抜けんだろって，ほんとにお考えなんで。魔法使いなんだ，お客さまは。そうでなきゃ悪魔そのものなんだよ。

旅人　女将さんは行きたいのですか，それとも行きたくないと。

おかあ　まずは一遍お客さまの両手を拝ませておくれよ！　鈎（かぎ）爪を隠す気もないんなら，どうして一体お袖がそんなにも長いんだい。どうして一体お祭服がそんなにも長いんだい。まるで，馬の足を見せるなって言われてるみたいにね。さあそれじゃ，お裾（すそ）を折り返してご覧なよ，ご良心ってのがおありになるんならね。

旅人　女将さんは先ほどわたしの恰好が実に洒落ているのをご覧になったばかりですよ。

おかあ　何，何だって。手袋はなさってたかい，象革のすね当てはなさってたのかい。その下ならまったく色んなものを隠すことができるし。

旅人　さあそれでは，女将さんにはこちらに残って，ご自分がどんな目にお遭いになるのか，待っていてもらいましょう。わたしたちが飛んでいってしまうと，家が倒壊するのです。せめて立ち退くようにして下さい。

おかあ　いや，いやだよ！　ここであたしゃ生まれたし，ここであたしゃ生きて死にたいんだ。守護霊がこんなにも長いことお守り下すったこの家を悪霊どもが壊せるもんか，拝ませておくれよ！

旅人　さあでは，おさらば（アディエー）！　それほど頑固一徹になさっているからには，せめて最後のご忠告くらいは従って下さい。すべてが終わるまで，両目をしっ

かり閉じていて下さい。では，神に身をお委ねして！（絨毯の背後に行く）

おかあ　神に身をお委ねして，だってさ！　まあ，それならまるっきり悪魔の口振りみたいに聞こえるってわけじゃない。この隅っこに身を潜めて，両目は瞑って，お祈りをして，あたしをどんな目に遭わせようってのか，様子を拝んでみたいね。

おとう　（絨毯の背後で）達者でな，女房！　さあ，出立じゃ。

おかあ　（右手の脇に跪（ひざまづ）き，両手で目を塞いで，すっかり我を忘れた体（てい））そうさ，これから行くんだね。もう聞こえてくるよ，ゴウゴウ，ザワザワ唸る音が，キャーキャー，ワーワー泣き喚いてはウーウー喘（あえ）ぐ声が。悪霊がみんなを鈎爪に掛けてるんだ。おやまあ！　なんとまあ！　可哀想な亭主！　あたしゃ運の悪い女房だ！　ギシギシ，メリメリ響く音が聞こえる。屋台骨が折れる，煙突が倒れる，壁という壁が裂ける。ああ，ああ！　外に出られたらねえ！　もうおしまいだよ。これであたしゃ最期なんだ。

①観相家（フィズィオグノミスト）：観相学（Physiognomik）――骨相学あるいは人相学とも訳される――は人間の身体構造の発現形態に取り組む学問であり，十八世紀を代表する最も重要な観相家（フィズィオグノミスト）であるラーヴァーター（Johann Kaspar Lavater: 1741-1801）――スイス人牧師にしてゲーテの青年時代の友人でもあった――は，主に人間の顔貌からその性格と知性を帰納的に逆推論しようと試み，『人間知および人間愛促進のための観相学的断片 Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe』（全四巻 1775-78年）を遺した。

②気球：1783年６月５日に初めて無人の熱気球を浮上させたドゥ・モンゴルフィエ兄弟（Michel-Joseph de Montgolfier: 1740-1810，Étienne-Jacques de M.: 1745-1799）の一連の飛行実験を指している。羊・家鴨・鶏を搭乗させた動物実験を行った後，人間が操縦する最初のパリ上空飛行に成功したのは，11月21日のことであった。一躍有名になった気球『モンゴルフィエール Montgolfière』号は，モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart: 1756-91）の歌劇『魔笛 Zauberflöte』（1791年初演）を始めとする舞台作品に取り上げられた。

③ファウストのマント：ゲーテの『ファウスト』（第一部・「書斎」の場　2063-2072行目）に，メフィストーフェレスが用意する「マント」と「熱い気体」を利用して，ファウストが牢獄のような書斎生活を抜け出し，少女グレートヒェン（Gretchen）が悲劇的な獄死を遂げる「小世界」およびギリシア神話を素材とする「大世界」（第二部）への新たな冒険に旅立つ描写が見られる。

ファウスト　どんな風にして一体俺たちは家から出ていくんだ
　どこにお前は馬や馭者や馬車を押さえてあるんだ
メフィストーフェレス　この**マント**を広げるだけですよ

こいつに空中を飛ばせて　わたしたちを運ばせましょう
この大胆な一歩を踏み出すに際して
大きな荷物は持っていかないことです
わたしがご用意するつもりの**熱い気体**が少しあれば
わたしたちを素早くこの地上から引き上げてくれます
わたしたちが身軽であれば　速く上昇するのです
新たなる人生行路　お祝い申し上げます！

④月を引っ張り降ろす：ギリシア北東部のテッサリア（Thessalien）に棲む魔女達が呪文によって月を天空から引っ張り降ろして隠した（月食現象），というギリシア神話に基づいている。『ファウスト』（第二部第二幕・「エーゲ海の岩間の入り江」の場　8034-8043行目）に，歌声で船乗りを誘惑するという半人半鳥の怪女ズィレーネ（Sirene）が月の女神ルーナ（Luna）に歌いかける描写が見られる。

（**月**が天頂に留まっている）
ズィレーネたち　（断崖の上を取り巻いて陣取り，笛を吹き歌を歌いながら）
かつて　夜の戦慄の下
テッサリアに棲む魔女どもが
放埒（ほうらつ）にも　汝を引っ張り降ろしたけれど
今は汝　自らの夜の蒼穹より
穏やかな光を放ちつつ
震える海原に映る輝きの群れを　安んじて眺めておくれ
そして　波間より浮かび上がって跳ね回る群れを
照らし出しておくれ！
進んで汝（ルー）のいかなるお役にも立たんとするわたしどもに
美しき**月の女神**（ナ）よ　恵み深くあれ！

第十一場

（舞台は壮麗な広間へと変貌する。同時に絨毯が持ち上げられ，ある程度の高さのところで天蓋として宙吊りになっている。その下で，**パートス**は悲劇の衣装，**フォーネ**は歌劇の幻想的な衣装，**ニュンフェ**は白い衣装を身に纏い，薔薇の花綵（はなづな）を手にしている。**メルテンおとう**は旧弊に堕さないフランス式の大礼服を着て，頭には総（アローンジェ・ペリユツケ）　　鬘をつけ，杖をつき，帽子を脇の下に挟んだ姿で立っている。**第二の少年**はふたつの大きな仮面，つまり悲劇の仮面と喜劇の仮面を両手に携えている。**第一の少年**は体の縦半分が黒色と薔薇色と

に分かれた衣装を身に纏い，手にはふたつの松明（たいまつ）をかざしている。**旅人**は**メルクーア**として登場する）

おかあ　さあ，終わったよ！　何もかもこの通り静かになっちまった。今あたしゃおそらくまたパチパチ瞬きしていいんだね。（指の間に目を向けた後，一群の人々と家をじっと見つめる）どこに来たんだろ。あたしも拐（かどわ）かされてるのかね。あたしの周りは何もかも変わっちまったのかい。ああ，あたしゃなんて恰好を。こんな普段着を着てるのに，こんな高貴な方々に混じって教会にいるなんて！　どこに潜り込もうかね。（自分の一番近くにある書き割りの中に入る）

第十二場

前場の人々（マルテを除く）

パートス　神々のお陰をもちまして，あたしたちは故郷に連れて来ていただきました。奇跡の建物が完成しております。こちらに逗留して暮らすのは，なんて素晴らしいことでしょう。いらして，お姉さまたち！　ご一緒にあたしたちの新しい神殿の会堂という会堂を隈なく調べましょう。（悠然とした足取りで背景の方へ行く）

第十三場

前場の人々（パートスを除く）

フォーネ　（ニュンフェに向かって）ここが飛び抜けて気に入ったわ。
ニュンフェ　あたしたちが元いたところにいるのなら，いいのだけれど。あちらにいるほうがやはり居心地がよかったわ。
フォーネ　ご覧なさいよ！　なんて愛らしい子どもたちがあたしたちの傍らに立っているのかしら。あたしの傍らにいる坊やは，格別に愛らしいわ。お前

は顔を背けているね，愛しい坊や！　あたしを避けるなんて！　ああ，離れないでおくれ！　あたしの腕の中においで！

第一の少年　（左手へ動く）

フォーネ　（少年を追う）

第一の少年　（右手へ向きを変えて，黒い半身を見せる）

フォーネ　あたしは何を目にしているの。なんと千変万化の無節操なカメレオンなのかしら，お前は。最初お前はあらゆる魅力を振りまいてあたしを惹きつけたのに，今では恐ろしく見えるわ。この変身を見れば，お前の正体がよく分かるというものね。

第一の少年　（再び左手へ向きを変えて，明るい半身を見せる）

フォーネ　今再びあたしには，明るくて美しいお前の姿が見える。そんな風に交互に変わってくれたら，お前はまさしくあたしのお気に入りよ。お前をさっと引っ掴んで，しっかり離さないようにしなくては。それができないなら，お前を永遠に追いかけ回してやるから。（背景左手に沿って，ふたりとも退場）

第十四場

前場の人々（フォーネと第一の少年を除く）

ニュンフェ　（第二の少年に向かって）これら煌（きら）びやかな絢爛たる広間で，無限の空しさばかりを覚えてしまう広間で，愛しい坊や，あたしの胸にすがりついて，お前のうちに宿る子どもらしい自然に包み込んで，あたしを元通り回復させておくれ。

第二の少年　（喜劇の仮面を持ち上げて，ニュンフェの顔の前にかざす）

ニュンフェ　ああ，汚らしい！　なんて忌まわしいこと！　なんて恐ろしい姿なの！　なんてぞっとすることかしら！　離れて！（数歩左手へ進む。少年はその後に続く）あたしをほうっておいて！　下がりなさい！　なんという悪霊があたしを追いかけるのかしら。だってあたしの心はここにいると，何ひとつよいことを予感しなかったのだから。どんな風にして逃れようかしら。どこへ逃げようかしら。（少年に追いかけられながら，背景右手へ逃げ去る）

第十五場

前場の人々（ニュンフェと第二の少年を除く）

おとう　（その間ずっと不審な面持ちで立ち尽くしていたが，左手に沿って，少し歩み出て）実に不可思議じゃな，ここは。わしはまだ驚天動地の思いから立ち直っておらん。わしがやっぱり知りたいのは，どんな風にことが起こったのか，わしらがどこにおるのか，どんな王様がこの宮殿にお住まいなのか，じゃろうか。けど，とりわけかたじけのう思うておるのは，こちらの面々がわしらの衣装もすぐに手配して下すったことじゃな。これは，これは！　これならわしらは宮中に参上してさぞかしお目見えできるもんと，思うんじゃが。（着心地よさそうに背景へ歩いていく）

第十六場

メルクーア　（独りきりで。観客の方へ歩み出て）
本日　わたしどもの祝賀を神に奉献せんものと
頼もしく詰めかけて下さった多数ご臨席の皆さま
柿落(こけら)としのこの劇の軽佻浮薄な縺(もつ)れ合いを
好意ある目でご覧になり　好意ある耳で
謎めいたお喋りを進んでご理解下さったとすれば
わたしどもも感謝に満ちて　自らの本分を心に銘記しております
そして躊躇(ためら)うことなく　わたしがこちらに遣わされて参りましたのは
間髪を入れぬわたしどもの戯れを今なお覆って漂っているやも知れぬ
帷(とばり)を急ぎ取り除かんがためなのです

黄昏(たそがれ)に包まれるとしばしば心から喜ぶのが　感情であるとすれば
太陽の澄み切った明るさが満たすのは　精神のみです
そして皆さまの精神に語りかけるため　わたしどもは
皆さまの元にお立ち寄りして　固有の形式が持つ色とりどりの多様性を

大胆不敵に遠慮なくご披露した次第です

従って何よりもまず　皆さまはお見逃しにならなかったことでしょう
あの農家の居間に備え付けられた背の低い炊事道具の意味するものが
あの古びた芝居小屋であるということを
それはわたしどもと同様皆さまを　周囲を取り巻く不快なものでかつてたびたび悩ませ
わたしども一同　常日頃忌々しく思っておりました芝居小屋なのです
あの芋虫の殻は粉砕され　わたしどもは新たに生まれ変わって
この広大な神殿の広間に登場するのです
このことは深い意味を有していると同時に　現実でもあります
と申しますのも　皆さまはわたしどもと同様　以前よりも居心地のいい席にお着きだからです
それゆえ　感覚と力を尽くして計画を練り上げた建築家に称賛を！
手を尽くして仕上げた建築の職人たちにも称賛を！

そしてわたしどもが古びた場所から新たな場所へと
歩いて入ったのではなく　思いもかけず
高次な働きによって　どうやら導かれたようであるならば
これらの戯れが示しておりますのは　わたしども皆が
気高い芸術の高次な領域へと次第に飛翔していく
心構えができているということなのです

ですが　わたしどもの心に浮かんでおりますのが
神々によって一切は始められねばならぬ　というあの古えの箴言[①]ですので
皆さまに思い出していただきたいのは　ご恩顧をもって
新たな状況の明るい見通しを授けて下さったあのお殿さま方[②]のことなのです
つまり　同じひとつの古えの一族を祖として　活動するお力を身に備え
高貴なる行為の無限の圏域の中へと
わたしどもすらも　その父なる腕に抱いて　有り難くも受け入れて下さった
あのおふたりの君主の方々のことなのです

皆さま　感謝を捧げていただきたいのは　この国を統べるあの最高のご主君に対して
つまり　その父なる手のお陰をもって
装いも新たに緑に飾られた好ましい谷間で
わたしどもにさえもこの場所を充てがおうと思し召して
臣下の皆さまと同時に　わたしどもにも　法に適った平安と
実り溢れる確実な永続とを授けて下さったあのご主君に対してなのです
皆さま　次いで感謝を捧げていただきたいのは
お側に仕える声高き合唱の鑑(かがみ)となる者たちを　わたしどもの元に派遣され
芸術と学問を広めておられる　あの血縁深きお方に対してなのです

そういうわけで　父なる君主のおふた方が
この新たなる造営物に　これほど高きご恩顧をお示し下さったのは
他ならぬこの場で　わたしどもと皆さま双方が楽しみながら
相互に自己形成するわたしどもの本分を忘れぬためなのです
と申しますのも　諸芸術のひとつたる合唱は　歩き易く切り拓かれた道を
見出さない限り　決して心地よく登場しないものだからです
野生のままの灌木を通って
近づき難く自然のままに絡み合った茨(いばら)を通って
合唱は　軽やかな踊りを心地よく牽引できるものではありません
踊りを成し遂げるために　どんなものがご披露されようと
それが成功し　更に成長を続けるのは
ひとたび形成された心と感覚が明るく　生命力を漲らせて
踊りの実現に向かって存分に努力する時に限られるのですから

そんな風に　わたしどもにこの場をお任せ下さったあの方々はお考えです
そして　この実り豊かな耕地と国境を接しておられる
あの偉大なる国王③も同じお考えなのです
あの国王もまた　健やかな頑丈な幹に接ぎ木されて結実した
立派な気高い果実をお楽しみになるのを待ち望んでおられ
純粋な風習の内なる掟が
自国民の胸の中で生き生きと打ち立てられるのを期待なさり

美しい芸術の広野を通る道すがら
人生に適った目的にじっと眼差しを注がれておられるのです

こうして　地上の神々である皆さま　今やこの劇場を神に奉献しつつ
品位ある真剣なご臨席および気高いお心で　満たしていただきたいのです
それは　観察しつつあるいは活動しつつ　わたしども皆が同時に
高次なる形成に確固として向かっていかんがためなのです

そして　百の腕を持つ幻の巨神④たる
舞台芸術は　あらゆる自己形成に
限りなく多様で豊かな方法を提示するものではないのでしょうか
それをできる限り多く　わたしどものささやかな圏域に引き寄せることが
わたしどもの劇場を守り通す揺るぎない掟なのです
そして　わたしどもは本日早速　わたしどもがもたらすものを
皆さまに　比喩の形で演じた次第です
最後に　これらの比喩について釈明する責任が　わたしにはございます
それは　皆さまにはっきりとわたしどもの趣意全体をご覧いただくためなのです

①あの古えの箴言：古代ローマの詩人ヴェルギリウス（Publius Vergilius Maro: 前70−前19）の箴言「始原はユーピターの元にあり Ab Jove principium.（＝Der Anfang ist bei Jupiter.）」（『第三の牧歌 Die dritte Ekloge』60行目）に基づいている。
②あのお殿さま方：26歳の若きゲーテを枢密顧問官として招聘したザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ公国の君主にしてラォホシュテット新劇場創設者であるカール・アウグスト公（Herzog Carl August von Sachsen-Weimar-Eisenach: 1757−1828），およびザクセン選帝侯国の君主フリードリッヒ・アウグスト選帝侯（Kurfürst Friedrich August von Sachsen: 1750−1827）を指している。両者はともにヴェッティン家（das Haus Wettin）の出身であり，湯治場ラォホシュテットの興隆に多大な貢献をした。
③あの偉大なる国王：諸芸術と学問の振興庇護者であるプロイセン国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世（Friedrich Wilhelm III. von Preußen: 1770−1840）を指している。
④百の腕を持つ幻の巨神：ギリシア神話によれば，オリュンポス神族（Olympier）と巨神族（Titanen）が十年間戦った際，「百の腕を持つ者」を意味するヘカトンケイル（Hekatoncheir）達がゼウスに味方して勝利を得，巨神族を黄泉の国タルタロス（Tartaros）に幽閉してその番人になった，という。ゲーテはこの巨神の特性を，様々な技法を駆使して展開される「舞台芸術 Schauspielkunst」に擬している。

第十七場

メルクーア，マルテおかあ

おかあ　（急いで右手から入ってくる）ほんとに誰も，まったく誰もここにいないのかい。あたしゃ走って，だだっ広い回り廊下に入っちまった。息が切れそうだね。こんなにひとっ気がないとあたしゃ心配になるよ。

メルクーア　こうなると女将さんのお陰で　ご口上は打ち切りです

おかあ　（メルクーアを目に留めて）ありがたや，生き身のお方がまた現われた！　あなたさまがどなたさまであろうと，あたしを哀れと思って，あたしがどこにいるのか，亭主がどこにいるのか，おっしゃって下さいまし。きっとあの魔法使いどもと繋がってるお方なんだから，あたしの晴れ着を持ってきて下さいましな。うちの引き出しの中に実にきちんと重ねておいてあるもんだから。皆さまのおひとりにとっちゃあ，ちっちゃな包みひとつなんだし。それに礼儀作法を充分弁えた者として自分を売り込むことに，あたしのすべてが懸かってるんだから。

メルクーア　（観客の方に向きを転じて）
とはいうものの　女将がこの場におられるのを早速利用しまして
こう申し上げましょう　こちらにおられるこの女将さんは
見栄えがどんなに大したものでなかろうと
寓意（アレゴーリッシュ）を表わす性格の持ち主そのものなのだと

おかあ　えっ，何だって。あたしが性格の持ち主だって。寓意（アレゴーリッシュ）を表わしてるっておっしゃるのかい。あたしがそんなやつだって悪口を，もうひとりのお方もおっしゃってるよ。あたしゃ寓意を表わしてなんかないし，流行（ア・ラ・モーディッシュ）を追っかけるもんでもないし。けどあたしが礼儀作法を弁えて，高貴なお仲間と連れ立って姿をお見せするために，こざっぱりした服を手に入れたいって思ってるとすりゃ，そいつは当然の義務ってもんなんだよ。普段着を着て教会へは行かんもんだからね。

メルクーア　（ずっと観客の方を向いたまま）
女将さんのことはおそらく　象徴（ズユンボーリッシュ）を表わしているとも呼べましょう

おかあ　これじゃあんまりってもんさ，お客さま。あたしゃ愚（ズィンペル）かもんじゃない

よ。気がよくて単純素朴な女房ってのが，あたしなんだ。あたしゃいつまでもそうありたいんだし，そう思われたいんだよ。（泣く）

メルクーア　（先ほどと同じ姿勢で）

さあ　お泣きなさい　わたしが自分の思いをもっとはっきり説明するまでね
女将が象徴（ズユンボーリッシュ）的に表わしているのは　あのきびきびとした劇
皆さまの前で　人間たちを敢えて奇怪（グロテスク）に演じようとする劇なのです
演じられるのは　偏狭な我意　激しい欲望
そして嫌悪の情　猛り狂った怒りと惰眠
軽佻浮薄な向こう見ず　卑しい高慢なのです
このような劇に　女将は　至芸をご披露する者として登場し
加えて　幾多の意味で皆さまを楽しませてくれます
とはいえ本日　女将はただ独り　農家の女房を演じんものと
この通り固く心に決めたのです（女将の方に向かいながら）奥様（マダム）！

おかあ　あれっ，何だって，奥様（マダム）だってさ！　マルテおかあなんだよ，あたしゃ。

メルクーア　およそこの広間に足を踏み入れられるお方は　奥様（マダム）なのですよ
ですから　さあ　溶け込んで下さらなくては

おかあ　（メルクーアの顔を鋭く見つめながら）あたしの思い違いでなけりゃ，お客さまはそれどこか，あたしから亭主を拐かしたペテン師なんだ。あたしの亭主はどこなんだい。

第十八場

前場の人々，メルテンおとう（大礼服を身に纏っている）

メルクーア　このことをお知りになるには　あちらから厳（いか）めしくゆっくりと歩いてこられる閣下にお尋ねなさい
あのお方なら何もかもご存じのはず　というのも　もう長きに亘って
わたしども皆をひとつに纏めておられる女王の執（ファク・トートゥム）事をなさっておられるからです

おかあ　（敬意の念を募らせながら，入ってくる閣下の方に向かっていく）

メルクーア　本当のことを申します　なにしろ　このお方のご尽力は

皆さまよくご存じの通り　幾多の分野において多岐に亘っておられるのですから

ですが　本日お演じになられるのは
市民生活の心の動きを　真の形式と色彩を帯びて
皆さまの目の前にご披露する愚直者の劇なのです
この種の劇について　ドイツの舞台がどなたのお陰を被っているのか[①]　皆さまご存じの通りです
何の支度もなしに　わたしどもはこの分野に参ったわけではございません

（他のふたりが前に進み出ると，メルクーアは少し後ろに引っ込む）

おとう　（女房に注意を払うことなく，厳めしく舞台前部に向かって姿を見せる）女将さん，ご用の向きは何じゃ。

おかあ　ああ！　旦那さま！　うちの亭主はどこなんです。あたしから亭主を拐かしたお方だね。お願いです，後生だから，亭主を連れ戻して下さいな。

おとう　ご亭主を徴兵官どもが連れ去ってしもうたのかの。これほど若うておきれいな女将ならさぞかし，見目麗しゅうて頑健なご亭主がおるやも知れんな。ご亭主がおらんようになってしもうたとは，お気の毒なことじゃて！　今は新兵集めがいささか激しいもんでな。

おかあ　おやまあ！　閣下は何をおっしゃるんです！　頑健だとか，新兵だとか，何をおっしゃるんです！　女房の尻に敷かれて貧しく老いぼれて体の弱った亭主の面倒を，あたしゃもう何年もただただこうやって親身に看なくちゃならないんですよ。

おとう　（半ば独り言で）えいっ，この忌々しい女房めが！

おかあ　閣下はどう思いなんで。

おとう　（怒りをこらえて）わしが思うに，女房殿にはご亭主のことをもっと上手う言ってもらいたいもんじゃがの。

おかあ　お許し下さいまし，閣下。恐れ多くも畏（かしこ）くも，ほんとでないことは申し上げられませんです。家の切り盛りはまるっきりあたし独りに懸かってるし，野良仕事もただただその通りなんで。今じゃ亭主は混じりっ気なしにのらくらしてはパイプ煙草を燻（くゆ）らせながら，新家を建てるのを思いついたってわけです。これをどう考えたらいいもんか，そもそもあたしにゃまるっきし分からんのです。今こんなことは言うなっておっしゃるかも知れんけど，ほんとのことなんで。以前亭主は四つん這いになって，あの通り世間様を渡り

歩くだけで，右も左も見んまま，見境もなしにあたしの言いなりだったです。けど今じゃ突然あと足で立って逆らっちまったってわけなんですよ。

おとう　いっぱしの人間みたいにまともにかの。そんなら，ご亭主はそうするんがいいんじゃよ。

おかあ　とんでもねえです。なにしろ亭主どもってのは，ちょこっと手綱を緩めると，すぐ羽目を外すんだから。亭主が関わり合いになった魔法使いどもは，亭主を一目散に連れ去って，あたしまでも魔法に掛けちまったんで，あたしゃうちのどこにおるんだか，自分でも分からんのです。何もかも白髪頭の阿呆な亭主のせいなんですよ。

おとう　ご老体を蔑ろ（ないがし）にするようなもの言いはやめてもらいたいもんじゃな！　いいかね！　わしも年寄りじゃが，女房の尻に敷かれとらんし，のらくら者でもありゃせんぞ。

おかあ　ああ，ひらにひらにご容赦下さいましな！　閣下とはまるっきし事情が違ってます。閣下はこの通りしっかりと両足で立っとられて，しょっちゅう膝を折り曲げて足を引きずってるうちの爺さまどこじゃねえですから。閣下がなんとおきれいに背筋をピンと伸ばしとられることかってのに，うちの爺さまときたら，背中を丸めてへいこらへいこら歩いとるんですよ。閣下のつるつるしたお顔には皺ひとつ認められんです！　それどこか，礼儀作法と威厳のある鬘ときたら。こんなお方がおりなさるなんて，奥方さまはなんとお幸せなこって。

おとう　わしの奥方が旦那さまの影に隠れてどんなもの言いをしておるか，誰に分かろうて。

おかあ　ご立派なこと以外に，奥方さまに何ができるっておっしゃるんです。

おとう　そんなことは気のいい亭主なら誰しも思っとるのに，鼻面を引き回されるんじゃ。けど，その報いはわしら亭主にはあんまりひどすぎるというもんじゃて。マルテ！　マルテ！　お前がそんなやつだとは思わんかったぞ。

おかあ　あたしゃ何を耳にしてるんだ！　何を目にしてるんだ！　閣下とうちの亭主が同じひとりなんかね，ふたりなんかね。

メルクーア　（衣装を一着腕に抱えて，ふたりの間に割って入る）
もちろんご亭主ですよ！　この奇跡の国では
奇異の念を抱くに及ばないのです　お気持ちを落ち着けて　女将さん！
ですが何よりもまず　どうかこの衣装をお召しになって下さい

この衣装も奇跡を行うことでしょう
これをお召しになれば　女将さんのご記憶は生き生きと蘇りますよ
以前の境遇をすぐに思い出されることでしょう

おかあ　さあ，見せて下さいましな！（衣装を受け取る）

メルクーア
で　魂の彷徨というのを耳にされたことはないと

おかあ　ああ，あたしの魂かそれともあたしの体が彷徨（さまよ）ってるのかなんて，分かりゃしませんよ。

メルクーア　わたしたちはまさしく皆
このように活発に移動して彷徨う魂なのです
折りに触れて　ひとつの体から別の体へと移っていく魂なのです
例えばです！　ヴンシェル夫人②のことはご存じないと

おかあ　そう，フォン・ヴンシェルの奥さんのことをおっしゃりたいんだね。あのお人のことならまだ実によく覚えてるよ。可愛い，可愛い奥さんだね。（ここで，マダム・ヴンシェルの役柄から適切な一節が挿入される）

メルクーア
フォン・ブルームバッハ夫人③のこともさぞかしご存じないわけでは

おかあ　ああ，そうだね。女盛りのご夫人だね。あのお方には，あの通りお馬鹿な姪ごさんがいなさったよ。（ここで，フォン・ブルームバッハ夫人の役柄から適切な一節が挿入される）

メルクーア　こういったご夫人方皆さまだったのですよ　女将さんは
それに　お望みになるや否や　今もなおそうなのです　可愛い奥様！

おかあ　今お客さまのおっしゃりようは実に筋が通ってる。そいつは結構なことだね。

メルクーア　さあ，気高きご主人！　こちらにおられるご夫人にお手を！
仲直りを！　メルテンが見舞われたどんな災厄にも
閣下は報復なさってはいけないのです
（夫婦は握手を交わす）それで結構
そして今や　わたしどもの神殿のバウキスとフィレーモンとして
紳士淑女の皆さまを楽しませる幸福を
この先まだ長く長く　味わって下さい
やがて　森林監督官およびその令夫人④として

芸術と自然の輝きに包まれて　歓迎と賛美の声を浴びて　ご登場下さい
ですが思いますに　もうお時間です　わたしどもは失礼いたしましょう

おかあ　まあ，もちろんだよ！　分かりきったことさ。鳩小屋から出ていく猫みたいに，あたしらはこっそり立ち去るつもりはないよ。これであたしらは心からお暇乞いをしたってことにしたいね。お客さまがお立ち寄り下すって，ご贔屓（ひいき）にして下さるお気があるんなら，いつなりと歓迎しますよ。

おとう　わしもお喋りな女房と同じ考えじゃ。ご一同さま，お達者であらんことを祈りまする。（おかあに腕を差し伸べる。ふたりは一緒に退場する）

①ドイツの舞台がどなたのお陰を被っているのか：観客の涙を誘う感傷的な教訓性と娯楽性を併せ持つ「家庭劇 Familiendrama」をドイツの舞台に広く普及させた俳優・舞台監督・劇作家のイフラント（August Wilhelm Iffland: 1759-1814）を指している。

②ヴンシェル夫人：ゲーテ時代の演劇界の人気をイフラントと二分した劇作家コッツェブー（August von Kotzebue: 1761-1819）喜劇『ふたりのクリングスベルク Die beiden Klingsberg』（全四幕 1805年初演）に登場する人物。下宿屋を営むウィーン在住のこのお喋りな女主人は自らを貴族であるかのように「フォン・ヴンシェル夫人 Frau von Wunschel」と呼ばせている。

③フォン・ブルームバッハ夫人：同じくコッツェブーの喜劇『お転婆 Der Wildfang』（全三幕 1798年初演）に登場する結婚願望の強い中年女性。喜劇の中では姪ではなく娘が，母親である夫人から「馬鹿女 eine Gans（原意は鵞鳥）」と罵られている。

④森林監督官およびその令夫人：イフラントが最も成功を収めた劇『狩人たち Die Jager』（全五幕 1785年初演）に登場する主人公アントーン（Anton） の両親であるヴァールベルガー（Warberger）夫妻のこと。「田舎の風俗画 Ein ländliches Sittengemälde」という副題に相応しく，実直で善良であるが口喧しい父親と，息子の恋路を邪魔して，高慢で気取った貴族の娘との婚姻を画策する母親の姿が活写されている。ゲーテはこの作品に自ら「前口上」を付けて，1791年ヴァイマル宮廷劇場の柿落とし公演を行った。

第十九場

ニュンフェ，第二の少年（そのあとを追いかける），**メルクーア**

ニュンフェ　（仮面を手にして追い立てる少年を怖れて逃れる。メルクーアの元に駆けつけて，首に抱きつく）あたしをお救い下さい，見目麗しく神々しいお若い方，あたしを追いかけてくる恐ろしい亡霊から。少し前あたしには，

人間らしい自己形成を積んでおられると思われたあなたさまですもの。すぐにあたしの心はあなたさまに好意をお寄せしたのです。地上のお飲み物でご気分を爽快にして差しあげましたわ。今度はあなたさまの天上の威力もあたしのお役に立てて下さいな。

メルクーア　甘美なあどけない情熱に燃えるあなた　わたしの気分を回復させて下さい

ニュンフェ　あなた方があたしを無理にも連れ去っておしまいになったのよ，あたしが無邪気この上ない喜びを味わったあの静かな鄙(ひな)びた住まいから。あなた方があたしをこの広間にお連れになったのだわ，ここにいると，あたしを魅了するものが何ひとつ見つからないし，仮面に追い駆けられるし。それから逃れるには，あなたさまの胸にお縋(すが)りする他ないのだわ。

メルクーア　（ニュンフェがもたれ掛かっている間，観客に向かって）
皆さま　この美しい娘がわたしの胸に身を押しつけますゆえ
わたしの頭は混乱を来しております
わたしが神として姿を現わしましたこと
その上　語り手(プロログス)①として　この柿落としの説明者(コメンタトーア)②として
皆さまの前に立たなければならないことを　危うく忘れかけております
ですが　お許しのほどを！
自分の立場は甚(はなは)だ容易ならざるもの　とわたし自身思っております
そして　この美しい愛情豊かな娘が急ぎ回復して
わたしが素早くこの娘から離れることができなければ
帽子と靴と杖とを飾る小さな翼を
ただ一度の口づけに対する質草にするのでは　と大いに危惧しております
その間に　皆さまのために　能う限り心を落ち着かせ
これだけのことはお話し申し上げたいと存じます
気立てがよくて優しいこの娘は　愛らしいもの　自然なものを意味しており
それは　あるがままに誠実に心を打ち明けて
隠し立てすることなく　自らの駆り立てられた感情を
木々や花々　森や河　岩や古びた城壁および人間たちに託するものなのです
（ニュンフェに向かって）
あどけない魂のあなた　落ち着かれましたか

第二の少年　（メルクーアに向かって）

あなたさまは皆のことを　こちらのお客さま方に向かってお話しだ
ただ僕のことはお忘れですよ　僕が何者なのかも　お話ししてよ
メルクーア　今やお前の番が来たのは　まことにもっともだ
だが　自分でいいところを見せてご覧！　分かるね
わたしはこちらでしなければならないことがたっぷりあるのだから
溌剌として大胆に進み出て　こう話してご覧
僕はこの合唱団一の若輩者です　ある老練な友だち[3]が
ローマの頽(くずお)れた廃墟から　いやそれどころか
古びた学校の塵芥から　新たに蘇らせて連れてきた仮面劇なのです　とね
お前の仮面を見せてご覧！　そこにあるのを！
（子どもは喜劇の仮面をかざす）
この粗野で風変わりな芸術の所産が示しておりますのは
力任せの形をした異様な顔のものです
（子どもは悲劇の仮面をかざす）
ですが　こちらの仮面は　高次にして美しいもの
普遍的で真剣な面影を予感させるものです
高名な芸術家たちの個性は取り去られており
詩人のお気に召すまま
一群の見慣れぬ男たちが　皆さまの目の前に急ぎ姿を現わして
多種多様な喜びをお与えするのです
このことに馴染んでいただくのは　まずは戯れの形でのみお願いいたします
と申しますのも　やがて　高貴なる英雄劇さえも
古えの芸術と品位をすっかり思い起こして
わたしどもから舞台靴(コトゥルン)と仮面を喜んで借り受けることでしょうから
皆さまはお前のことをご存じだ！　可愛いお前のことはもうこれで充分だ
もうひとつ　わたしたちに残されているのは
こんなに怯えて逃げてきたこの優しい娘を　お前と仲直りさせることだ
それゆえ　魂の先導者たる　わたしの杖をかざして
お前と娘に触れよう　さあ　お前たち
自然なものと　技巧を凝らしたものよ
もはや反目し合うことなく　常にひとつに相和(あい)して
舞台の喜びを　多種多様に高めるのだ

ニュンフェ　あたしはどうしたことかしら！　あなたさまがあたしの両の目から
取り去って下さったのは　なんという帷（とばり）なのでしょう
その間にもあたしの心は　普段のように暖かく　いえ普段よりも自由に燃え上がり脈打っております
（メルクーア，退場する）
こちらへおいで　おちびさん！　あたしが目にしているのは　敵ではないわ
あたしがお隣りに見つけたのは　ただ独りのお友だちなの
いつも重荷を積んでいるあたしの胸を明るくしておくれ
あたしの真剣さにお前の戯れを絡み合わせておくれ
そして苦い涙が流れたところで　あたしを微笑ませておくれ
あたしの心に思い浮かぶのは　ある詩人の古えの箴言なの
分からないまま　教え込まれた箴言
幸福な思いに浸してくれるゆえに　今や理解した箴言なの

自然と芸術　ふたつは遠ざけ合うかに見える
そして　思いもかけぬうちに　互いを見出した
逆らう気持ちは　わたしからも消え去った
そして　ふたつとも同じ力で　わたしを惹きつけるように見える

おそらく必要なのは　誠実なる努力のみ！
そして　わたしたちが然るべき時に初めて
精神と精励をもって　芸術に結びついたなら
自由に　自然は　心のうちで再び燃え上がるだろう

およそ形成というものも　そのようなものだ
法則に結びつかない精神の持ち主たちが
純粋なる高みの完成を求めて努力しても　空しいだろう

偉大なることを望む者は　心を集中しなければならない
制約の中で初めて　巨匠はその実を示す
そして　法則のみが　わたしたちに自由を与えることができるのだ

（ニュンフェ，少年とともに退場）

①語り手（プロログス）：古代ギリシア悲劇の上演に際して，合唱隊が登場する前にその内容を説明する口上役。
②説明者（コメンタトーア）：ルネッサンス時代に，イエズス会などがラテン語学校生徒の語学力の向上や道徳教育の強化のために振興した「学校劇 Schuldrama」――「イエズス会劇 Jesuitendrama」とも呼ばれる――に登場して，各場面の教訓めいた説明を行う者。
③ある老練な友だち：ヴァイマル劇場の演目向けに，古代ローマの喜劇作家プラウトゥス（Titus Maccius Plautus: 前254頃-前184）やテレンティウス（Publius Terentius Afer: 前185頃-前159）の作品を翻訳した侍従長フォン・アインズィーデル（Friedrich Hildebrand von Einsiedel: 1750-1828）のことであり，それらの演目に仮面を付けた人物が導入されたことを指している。また，次行の「古びた学校」とは，聖書や聖人伝説，またプラウトゥスやテレンティウスの作品などが題材として取り上げられた「学校劇」のこと。

第二〇場

メルクーア，第一の少年

第一の少年　（急いで走り寄りながら）
僕を守って！　あの後ろからあの女の方が僕を追いかけてくるんだ！
僕をひっつかまえようたって　ご免蒙るよ
メルクーア　世にも愛らしい奇跡の子よ　頃合いを見てお前は
わたしの両の手に　変化に富んだ色彩をした身を投げるのだ
この機会を利用して　皆さまに申し上げましょう
空想（ファンタズィー）をお目にかけるために
わたしどもは　人を怖がらせる坊やを慎重に選んだのです
このおちびさんは　制約もなく熱狂すると
機会の赴くままに　幸と不幸を招きます
皆さまに陰鬱な色彩で　過去を描いて見せ
くすんだ漆で　現在の喜びを
そして　不安を表わす蜘蛛の灰色の紗幕で　希望の魅力的な姿を
朦朧と包み込む時もあるでしょう
また　皆さまが深奥の苦悩に陥って既に絶望しておられると

世にも美しい朝焼けの緋色の縁取りを素早く
皆さまのうな垂れた頭（こうべ）に巻きつけて　元気づける時もあるでしょう
ですが　おちびさんは　おとなしくさせることもできるのです
いえそれどころか　わたしが信頼を寄せて
魂を導く杖をおちびさんの手に委ねるや
おちびさんは自ら　おとなしくするのです
即座におちびさんは規則に従い　生の素材が
一体となって　新たなる創造物へと形成されるのです
アポロンの竪琴①に促されたみたいに
石という石が動いて城壁となります
そして　オルフェウスの魔法の響き②に合わせるみたいに
森が急ぎ近づいて　神殿へと形成されるのです
わたしども皆をおちびさんが先導し　わたしどもはついて行きます
そしてわたしどもの行列をおちびさんが多種多様に絡み合わせるのです
しかしとりわけ　あちらの美しい娘が
歌唱の素早い翼に乗って　おちびさんを所望しております
おちびさんが手に入れば　こちらの娘はしっかり掴まえておくことでしょう
けれど　おちびさんが留まりたいのなら　娘はすぐに手放すことでしょう

①アポロンの竪琴：トロイ戦争に際してトロイ側に味方した音楽・技芸の神アポロン（Apollo）が七弦（または十一弦）の竪琴リューラ（Lyra）――本来はメルクーアが亀の甲羅を用いて発明し，兄アポロンの飼う牛を盗んだ代償に譲ったものとも言われている――を爪弾くと，石という石が繋がれて城壁を形成した，という神話に基づいている。
②オルフェウスの魔法の響き：父親アポロンから竪琴を譲られた名手オルフェウス（Orpheus）が奏でる霊妙な「魔法の響き」と歌唱は，鳥獣のみならず森の樹木や岩や河をも魅了し，オルフェウスの死に際しては皆こぞって悲嘆の涙を流した，という神話に基づいている。

第二一場

前場の人々，フォーネ

フォーネ　あなたさまが坊やを抱えておられるのを　あたしは目にしております！　それでは　坊やをお引き渡し下さい

メルクーア　まず　あなたのことをご説明するのをお許し下さい！

フォーネ　娘のことを説明するのも　芸術というのならね

メルクーア　（観客に向かって）
歌劇（オーパー）の持つ魔法の喜びを　この娘は演じております

フォーネ　あたしが何を演じていると

メルクーア　歌劇です　歌唱（ゲザング）なのです！

フォーネ　歌唱は演じることなどできませんわ　でも歌ってのけることなら

メルクーア　さあ溌剌と　皆の喜びのために　さあさあ！

フォーネ　（長い詠唱（アーリエ）を歌い，それを終えて舞台奥へと向かう）

メルクーア
わたしどもの色とりどりの劇が大詰めに近づいていますこと　弁えております
（第一の少年は，フォーネが歌っている間，舞台奥に留まっていたが，フォーネが奥へと向かうとすぐにまた，メルクーアのところに急ぎ進み出る。その少年に向かって）
ほら　わたしの杖をあげよう　さあお行き　お前
そして　皆を連れておいで
（子ども，退場する）

第二二場

メルクーア，パートス

メルクーア
わたしどもにとって本日　悲劇的なものを意味するこの娘は
静かなる真剣さに包まれてやって参ります　娘の声に耳をお傾け下さい
申し上げねばならないことは　娘独りでお伝えさせましょう
（メルクーア，遠ざかる）

パートス　途方もない所業が行われてしまいました

元に帰せと叫ぶ　熱き願いもなく
選択の余地も許されず　役立つ助言もないまま
あまねく幸せが　永遠(とわ)に飛散してしまいました
王たちにより　国土の上至るところ
注がれたのは　死をもたらす宿命なのです
なんという檻(おり)を　あたしは目の前にしなければならないことでしょうか
恐ろしきことが起こっており　これからも起こることでしょう！

隣人が隣人を　奸計を弄して刺し殺し
刺し殺した側もまた結局　奸計によって打ち負かされるのです
なにしろ　鍛冶屋が火の粉を浴びながら　輪に輪を繋ぎ合わせて
途轍もない鉄の鎖を造るように
残虐が　残虐に再び絡まり合い
悪徳所業が　悪徳によって罰せられるのですから
死の靄に包まれ　地獄の猛煙に巻かれ　戦慄の恐怖を覚える中
絶望だけが　独り巣食っているように見えるのです

けれど　いずれ　信仰厚きいたわりの心が
胸を締めつける漆黒の夜に降りてくると
気高い心の持ち主は誰しも
高次な圏域への優しい眼差しに触れて　目の覚める思いがし
皆さまをそちらへ急(せ)き立て　皆さまはそこに住む希望を抱くのです
突然　天国が皆さまにもたらされ
清らかなものによって　運命は和らげられ
善なるもの　美しきものに包まれて　何もかもが解きほぐされるのです

最終場

すべての人々（次の順序で並ぶ），**マルテ，ニュンフェ，第二の少年，パートス，第一の少年，フォーネ，メルテン**

メルクーア　（左手前に進み出る）
今や　一同打ち揃ってお仲間となり
親疎の間柄に応じて　最後に居並びましたからには
折りに触れて　一同ひとりひとりがお客さま方の目の前に立ち
各人の贈り物をご披露する将来の場合に備え
見極めがおつきになりますよう
一同のことを　充分ご記憶にお留め下さい
お客さま方がわたしどもを愛情豊かに　自らの本分へと向かわせることがおできになるのは
わたしどもがもたらすものに　ご同意下さる場合なのでございますから

『序幕劇のヴァイマル再演に際してのご口上』

船乗りというものは　無事の長い航海の果てに
幾多の見も知らぬ岸辺に逗留するのを楽しみ
陸に上がって　幾多の美しい果実を楽しむものとはいえ
生まれ故郷の港が　腕と胸を差し出してくれる時初めて
最高の願いの目的が達せられた　と感じるのです
わたしどももそれと事情を同じくしますのは　あの見慣れぬ場所で
活動しつつ楽しく過ごした幾多の晴れやかな日々の果てに
最後には　元の見慣れた場所で再会する時なのです
この祖国以外にわたしどもが留まるところがございましょうか
と申しますのも　わたしどもが自己形成するところが　わが祖国だからです
ですが　わたしどもの考え方　感じ方は　皆さま　既に充分ご存じですし
愛情と信頼と畏敬の念を抱いて　皆さまの前で
どれほどわたしどもが尽力しておりますかについても　よくご存じです
従って　わたしが今やこちらに遣わされて　皆さまにご挨拶し

わたしどもの集いを改めてご紹介するのは　余計なことと思われます
それにまた　厳密に申しまして　わたしが登場しておりますのは
それがためではないのです　たとえ皆さまがしばしば
見慣れたものすべてを聴いて楽しむのがお好みだとしましても
と申しますのも　本日お頼みしたいことが　多少なりとも
お許し願いたいことがございますから　そうなのです　まことにもって！
わたしどもが望むもの　わたしどもがもたらすものを
皆さまに言葉でお伝えすることが許されないのは　わたしどもが始めましたものが
皆さまの目の前で　徐々に繰り広げられていったことがあるからです
とはいえ　わたしどもがあのお隣りの地を訪れ
その地の新たな舞台を前にして
ことによれば　大胆な改革の冒険作を好意的な目で
ご覧にならないかも知れないとしましても　あの見も知らぬお客さま方を
わたしどもの望み通り　待ち受けたいと願う大いなる衝迫を抱いた時
わたしどもは打ち揃って　ひとりひとりが各人なりに
さだめし見苦しくなく上手くいくことを
成し遂げようと務めたのでございます
事実また　これは結局　わたしどもが誇りとしてよい演技の多様さを
軽やかに明るく指し示すものなのです
果たせるかな　これに成功して　わたしどもはご愛顧に預かったことを
幾多のやり方で楽しまないわけには参らなかったのです
ことによれば今　わたしどもはこれに留めて
とりわけあの場合に限って相応しいがゆえに　あの地で成功を収めたものは
再演しないのが　賢明なのかも知れません
この地ではやはり　そういうものは本来
幾多の箇所で相応しくないものかも知れないからです

けれど　個別のものは　同時に深い意味を有する時にのみ
普遍なものとしても働くのですから
わたしどもは敢えて　皆さまのご好意にお応えして　安んじて
わたしどもがあの地でもたらしたものを　皆さまに今ご披露申し上げます

皆さまはわたしどもにしばしば同行なさって　世にも遠い世界へ
サマルカンドへ　北京へ　そして妖精の国へ行かれたこともおありです
さあ　本日は
お隣りの湯治場へご一緒に赴くことにご同意下さって
短期間のうちに　まるで魔術によるかのように築き上げられた
その地の新劇場内の快適なお席にお着き下さい
その後で　皆さまがかつて不承不承ながらしばしば　観劇の楽しみを
お求めになった古びた小屋のことを　微笑みを浮かべて思い起こして下さい
と申しますのも　似たようなことがやはりこの地でも起こったからなのです

そして他の方々のために用意されておりましたものを
善意をもってお楽しみになるご決心をして下さるなら
皆さまはさだめし　幾多のものを見出され
ご自分とご自分の状況のために潔くわがものとされることでしょう
これらすべてのことを繊細な心に育まれますよう！　お願い申し上げます！
そして最後となりましたが　お初にお目にかかります紳士淑女の皆さまと
また　ザクセンおよびプロイセンからお越しの皆さまと　敢えてお呼びせねば
ならないお客さま方におかれましては
感情と空想を駆使なさって　わたしをお迎え下さい

附　記

劇『わたしたちがもたらすもの Was wir bringen』は，その副題「ラォホシュテット新劇場柿(こけら)落としに際しての序幕劇 Vorspiel bei Eröffnung des neuen Schauspielhauses zu Lauchstädt」に見られる通り，ザクセン地方ハレ（Halle）市郊外の湯治場ラォホシュテットに創設された新劇場の幕開きとなる夏季公演を契機として，ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe: 1749-1832）が1802年６月６日から11日という短期間のうちに執筆し，26日および翌27日に上演の運びとなった全二三場の序幕劇である。この序幕劇は，『わたしたちがもたらすもの』という題名に既に含意されているように，ヴァイマル劇場の俳優陣が演じる配役の科白・歌唱・所作・衣

装・小道具など演技の様々な表現方法を，観客が舞台上で「象徴的」および「寓意的」（第十七場）に直接目の前にしながら，演劇のジャンルとその可能性を探っていく演出が巧みに仕掛けられた極めて興味深い作品となっている。とはいえまずは，愚直者の「メルテンおとう」と正直者の「マルテおかあ」が，主役と目されるメルクーアとニュンフェを押し退けてしまう程に，面白可笑しく繰り広げる軽妙な掛け合い漫才風の演技を観客に素直に楽しませるのが，作者ゲーテの主な趣向のひとつではなかったのかと思われる。

それに続く『序幕劇のヴァイマル再演に際してのご口上 Prolog bei Wiederholung des Vorspiels in Weimar』（全61行）は，これまでラォホシュテット新劇場でのみ上演された『序幕劇』を同年９月25日および10月２日にヴァイマル劇場で再演するに際して，ゲーテが新たに付け加えたものである。この韻文調の『ご口上』は，「けれど　個別のものは　同時に深い意味を有する時にのみ／普遍なものとしても働くのですから」（41–42行目）という科白に明言されている通り，ラォホシュテット新劇場の開設事情に限定された「個別のもの」を，ヴァイマル劇場にも当て嵌まる「普遍なもの」へと一般化して観客と共有しようとするゲーテの意図を，メルクーアが前口上として観客に弁明する体裁を取っている。上演の時間的順序を遵守すれば，『ご口上』は本来『序幕劇』の前に置かれるべきものであるが，『序幕劇』を単独作品として取り扱っている種々の『ゲーテ全集』の編集方針に従って，『序幕劇』の後に『ご口上』を置いたことをお断りしておきたい。本作品を今回翻訳し，註を作成するに際して，典拠・参考とした『ゲーテ全集』などの文献は下記の通りである。

1. J.W.v.Goethe: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe(MA) in 26 Bänden. München 1988. Bd.6・1. S.750-788.
2. J.W.v.Goethe: Gedenkausgabe(GA) der Werke, Briefe und Gespräche in 24 Bänden. Zürich 1966. Bd.5. S.592-626.
3. J.W.v.Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Bibliothek deutscher Klassiker(BdK) in 38 Bänden. Frankfurt am Main 1993. Bd.6. S.265-300. u. S.888-889.
4. J.W.v.Goethe: Goethes Werke. Bd.11.1. S.189-228 u. Bd.11.2. S.406-408. In: Deutsche National-Lit(t)eratur. Historisch-kritische Ausgabe. Bd.92.1 u. Bd.92.2. Stuttgart.

5. Hans Gerhard Gräf: Goethe über seine Dichtungen. 2 Bände. Franfurt am Main 1912.

劇作品としての読み易さを図るために，下記の措置を施した。

1．冒頭部に置かれた「登場人物」の個々の役柄の後にゲーテが原文の中で挙げているヴァイマル劇場一座の俳優陣の姓――個人名の記載はない――について，本文中では省略したので，以下に挙げておきたい（括弧内は訳者の註）。

登場人物

メルテンおとう　**マルコルミ氏**（Karl Friedrich Malcolmi: 1745-1819）
マルテおかあ　**ベック夫人**（Henriette Beck: 1759- 没年不詳）
ニュンフェ　**マース嬢**（Wilhelmie Maas: 生没年不詳）
フォーネ　**ヤーゲマン嬢**（Karoline Henriette Friederike Jagemann: 1777-1848）
パートス　**マルコルミ嬢**（Anna Amalia Malkolmi: 1783-1851）
旅人　**ベッカー氏**（Johann Heinrich Cristian Ludwig Becker: 1764-1822）
少年ふたり　（俳優名なし。但し，手筆原稿では，**ゾフィー・テラー**（Sophie Teller: 生没年不詳）および**アーデルハイト・シュピッツェダー**（Adelheid Spitzeder: 生没年不詳）という女優ふたりの氏名が挙げられている）

2．ト書きについては，括弧書きを付している『ゲーテ全集』（4.）――その他の『ゲーテ全集』では斜字体――を採用し，科白とト書きの違いを明確に区別できるように図った。

3．韻文体の科白――特に，旅人が変身したメルクーアの第十六場以降の科白が顕著である――については，可能な限り原文に合わせて改行をし，句読点を施さなかった。

4．註については，作品理解のために最低限必要と思われるものに留め，各場の終わりに丸囲み番号を付して補った。

ニュンフェが劇中第十九場の終わりで朗読したことによって，本作品の存在をドイツ文学史上に留めるのに多大な功績をもたらしたソネット（Sonett）形式の十四行詩『自然と芸術 Natur und Kunst』の解釈については，拙稿「ゲー

テの詩《自然と芸術》――〈形成〉の意味するもの――」（大谷大学文学科研究室『西洋文学研究』第12号　1991年）を参照して頂きたい。この『序幕劇』そのものの存在意義については，稿を改めて論述する予定である。

なお，翻訳に際しては，先訳『私達のもたらすもの』（秋山六郎兵衛譯『ゲーテ全集』第十三巻　133-204頁　改造社　昭和11年７月19日発行）を大いに参考にさせて頂いた。この場をお借りして，厚く感謝の念を表する次第である。

〈キーワード：ゲーテ・演劇・自然と芸術〉